

# 高校生を対象としたメディア・リテラシー育成のための授業の開発と評価\*

高野恵義（学籍番号 200721540）

研究指導教員：葉袋秀樹

副研究指導教員：平久江祐司

## 1. 研究背景

今日のような情報化社会では、メディアは青少年の日常生活に浸透しており、最も利用時間の多いテレビを含むメディア利用時間は1日に5時間を超える。メディアでは、制作者によって意図的に構成された情報が伝えられるため、受け手は、メディアから発信された情報をそのまま鵜呑みにせず、偏りなく読み解くことができる力（メディア・リテラシー）を高めておく必要がある。

日本では、学校教育にメディア・リテラシーのカリキュラムが導入されていないが、これまでに熱心な教員、研究者によっていくつかの取り組みが行われてきた。しかし、これらの取り組みでは、授業時間数が多く他の学校での実施が難しい、授業の効果測定及び評価を実施していないという課題があった。多くの学校でメディア・リテラシーの育成を目指した授業を行うためには、これらの課題を解決できる授業案を開発することが有用であると考えられる。なお、現在、メディア・リテラシーの定義にはさまざまなものがあるが、本研究では、短時間で実施する授業の中で扱う内容を絞り込むために特に「メディアの読み解き」に焦点を当てることとした。さらに、メディアの読み解きについては、カナダのオンタリオ州が示している8つの要素の中で最も重要な概念である「メディアはすべて構成されている」を中心に扱うこととした。

## 2. 研究目的

本研究では、高校生のメディア・リテラシーを育成するための授業を開発・実践し（研究1）、授業による生徒のメディア・リテラシーへの効果を検討する（研究2）。さらに、今後気をつけたい点、疑問点などについても尋ね（研究2：授業評価）、最終的に授業の改善案を作成する。

## 3. 研究1

### 3-1. 予備調査

まず、授業で使用するメディアを決定するため、高校生77名を対象に予備調査を行った。

その結果、高校生にとってテレビがもっともなじみがあり、理解しやすく、信頼度もある程度高いと捉えられていたことから、テレビのコンテンツを用いた授業案を立てることとした。

### 3-2. 授業の開発と実施

授業のテーマは、メディア・リテラシーの教材として有用であると考えられているドキュメンタリー番組が多く存在し、ある事象に対し、複数の説が存在する「地球温暖化による海水面の上昇」をテーマとした。授業の流れは、このテーマにおいてテレビで報道された情報（海水面の上昇の主な原因は南極である）とその他メディア（インターネット、書籍）で放送されている情報（海水面の上昇の主な原因は海水の熱膨張である・南極の氷は増加傾向にある）の違いを提示し、それぞれの資料の提示後、メディアによってすべての情報は構成されていることについての解説を加えるように構成した。この授業案に基づく実践は、茨城県内の私立高校の

---

\*“Development and evaluation of media literacy class for high school students” by Shigeyoshi TAKANO

高校生6クラス、238名を対象として行った。

## 4. 研究2

### 4-1. 授業の効果

高校生238名を、授業を行ったグループ（実験群）と、授業を行わなかったグループ（統制群）に分け、授業を受ける前（事前調査）と受けた後（事後調査）にメディア・リテラシーの測定を行った。メディア・リテラシーの測定項目に対する因子分析の結果、3つの因子（「メディアの表現」、「メディアと社会」、「事実とメディア」）が抽出された。事前調査のメディア・リテラシーの因子得点それぞれを共変量、実験条件および性別を独立変数、事後調査のそれぞれの因子得点を従属変数として共分散分析を実施した結果、実験群において授業後に「メディアと社会」をより理解している傾向がみられた。

### 4-2. 授業の評価

授業の評価は、授業に参加した生徒に今後情報の読み解きの際に『どのような点に気をつけて情報を読み解こうと思うか』、『授業で理解することができた点』、『学んだ上で疑問に思った点』の3つの質問に自由記述で回答してもらった結果を集計した。自由記述を内容ごとにカテゴリ化した結果、『どのような点に気をつけて情報を読み解こうと思うか』では、主に「そのまま鵜呑みにしない」「他の情報源であわせて調べる必要がある」等のカテゴリの意見が多くみられた。これらの意見は生徒が「メディアはすべて構成されている」ことを理解し、その対処法を自分なりに設計できるようになったと解釈することができる。また、『授業について理解することができた点』についても、「編集の効果」「鵜呑みにしない」カテゴリの意見が半数以上の生徒にみられた。また、「海面上昇について」の理解もみられ、扱ったコンテンツのテーマについても理解をしていたことが伺えた。一方で、「メ

ディアはなぜ情報を構成するのか」「情報を構成しない場合どう違うのか」など、疑問点として挙げられた点もあり、今回の授業では解説が不十分であった箇所も具体的に示された。

## 5. まとめ

研究1と研究2の結果から、開発した授業案は、短い時限数で実施可能であること、授業実施の効果としては「メディアと社会」因子で得点が伸びる傾向があったこと、授業の評価からは、生徒たちが「メディアはすべて構成されている」の理解が概ねできており、また、コンテンツテーマの理解も高まることからテーマ設定によって他教科でも同様の実践が可能であることが示唆された。一方で、授業の改善案として今回の授業に対する疑問点についての解説を行う必要性も示唆された。そこで、本研究では、生徒の疑問点を解決することができるように、カナダのオンタリオ州によって示されたメディア・リテラシーの概念に当たる「メディアを読み解く8つの要素」を追記するなど、より詳しい解説付きの授業案（資料）を作成した。

本研究で提案した授業案が今後、高校生へのメディア・リテラシー育成のための授業として現場で実践されることを期待したい。

## 6. 参考文献

- [1] 内閣府政策統括官.“第5回情報化社会と青少年に関する意識調査”.内閣府ホームページ.2007-12.  
<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/jouhou5/index.html>(参照:2009-1-20)
- [2] カナダ・オンタリオ州教育省.FCT 訳.メディア・リテラシー —マスメディアを読み解く—.東京.リベルタ出版.1992.
- [3] 登丸あすか.高校生を対象としたメディア・リテラシー教育の実践 —前編—.視聴覚教育.2003.11.